

新編岩津町誌の青木川旧流路図

井田

て村に大量の土砂を残しました。現在、荒古・柳・蓮沼
 一帯に畑が多いのは州が入って高くなったからです。宝
 永二年（1705年）再び大洪水に見舞われました。こ
 の年6月28日に八剣神社東北の野越堤が決壊、未曾有
 のものであったそうです。「丕揚録」というものに、
 『岡崎諸水水溢し、塘（堤）を潰す事千間余、田を害す
 ること三万二千石余、家を破る事270戸、家を流す事
 92戸、溺死する者13人』と載せられています。堆積
 した土砂を高さ6尺に州寄せして、屋敷替えることに
 なり、17軒分が古屋敷から柳に移転しました（171
 1年）。字柳を俗に新家と称しているのはこのためであ
 るといわれます。

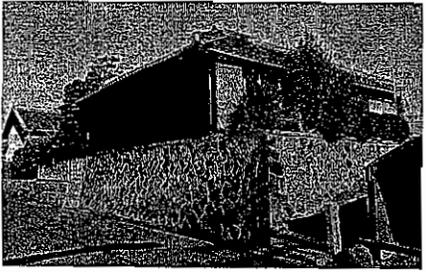
堤防の高さについて

東側が切れても被害は少なく、西側が切れると5倍位
 の米の収穫減になることから、西岸の堤防の方が丈夫に
 出来ていたようです。東岸の西蔵前では宝永から明和の
 60年間に27回水害の記録があります。そこで地元か
 ら、次のような嘆願書が出されたといわれています。（信光明
 寺国役普請願）

	東岸堤	西岸堤
敷幅	四間・五間・六間	八間・一二間・一五間
高	七尺・九尺・七尺	二・五間・三間
馬踏	三尺・五尺・七尺	二間・三間・五間

『右の事情であって、東岸堤は西岸堤よりいたって小
 堤の為降雨の度毎に堤押切り田畑荒し立毛生立申さず、
 従って堤防の改修を嘆願する。』（寛政六年11279四
 年）

ここで大樹寺に住んでみえる市川正一郎氏（明治三二年
 生まれ90才）の話を紹介します。



大樹寺の命塚(洪水の時、避難する場所)

宝永二年の青木切れの時
 には大樹寺の人たちは逃げ
 て藪下に部落を移しました。
 後に藩が砂を集めて部落を
 その砂の上に移転させまし
 た。その後も八帖切れなど
 2・3回切れ、下流から水
 がここまで来たこともあり
 ました。幼児の時床までの
 浸水もありました。

「大樹寺」

命塚は皆で砂を集めて作ったものです。他の地区の高い石垣を見学してから、明治四〇年頃に石積を二重にして作り上げました。その石垣の上に寄合場として建物を作りました。その後この地区の神社の修理に際し、資金があるということで競売にかけ、今の地主の所有になりました。

また、昔は今の国道248号付近に青木川の名残が流れていて、昭和の初めの頃も清水が集まって川になっていました。水の流れは速く、その水流を利用して精米を商売にしていた人もありました。川幅は2-3間でした。柿田川は小学生の頃から既に今の位置にありました。

大門町というのは北野の薬師寺（北野廃寺）の山門があった所で、当時大門の集落は矢作川の西側でした。大樹寺の集落ではこの家にも船が軒先に吊してありました。

寛政八年（1796年）にも洪水が大樹寺敷田の集落をおそいました。——

新編岡崎市誌より——

大門の八剣神社の敷地がら、平安時代より室町時代にかけたの土器や瓦が出土しました。又、永仁四年（12

96年）の頭文と鎌倉時代の懸仏、足利尊氏の墓、薬師如来座像もあって、この場所は当時からずっと川筋ではなかったことを物語っています。大門寺という古代の寺がここにありました。さらに八剣社の伝承としては、江戸時代の初めの頃70石の社領がありましたが、矢作川瀬筋掘替の際、40石余は川敷地となってしまいました。

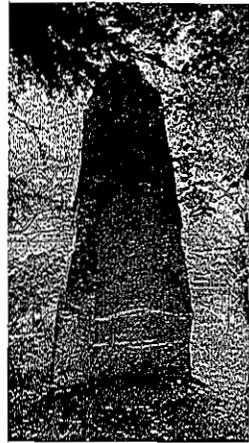
また、「新編岩津町誌」に戻って——

渡し場の項の中で、この付近に樞水、仁木（配津）、上里（宗定）、大門（北野）、日名の渡しがあり、渡船に関して粉塵したことがありました。文久・元治の頃（1864年頃）、仁木と配津の渡しは両村の住民の為だけの渡しであるのに、岩津の天神さんの縁日にお参りする人々を渡した、ということに対して、隣の樞水（細川町）の者が苦情を岡崎奉行所に出したり、渡し船を横領したため事件になりました。——

次に伊賀川について

昔の伊賀川の川筋は、伊賀八幡宮から西へ向かって、広幡小学校西の国道248号の少し西をほぼ直角に南下していました。明治四五年に今の川筋に付替えられました

た。国道248号の西側に「記念碑前」というバス停があり、そこに写真のような石碑があります。



伊賀川付替記念碑
「富國之礎」

広幡小学校のグラウンドは旧伊賀川を埋立てて作られたそうです。

伊賀川の伊賀橋（足助街道）から上流に桜並木がありますが、あれは1914年から翌年までかかって町の花咲か爺さんと親しまれた佐々木朝吉氏によって植えられたそうです。

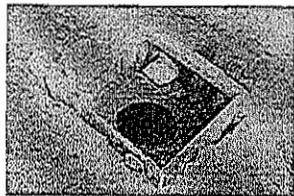
矢作川河床遺跡

矢作川の河床が低くなったことにより、全国的にも珍しい、膨大な量の遺物や遺跡が発見されています。竊大橋の付近から美矢井橋の下流に至る10km余の間には縄文から中世までの各時代にまたがる土器や陶器、井戸

跡や寺院跡などが見つかっています。

土器や陶器は、その状態がすり減っていないことから、上流から流れてきたものではないようです。弥生式土器はその特徴である油煙の跡は黒く残ったままです。人の顔を墨で描いた人面土器は何故そのような絵を描いたのか謎となっています。

古井戸について、愛環鉄道の上流河川内左岸側から昭和六一年に護岸工事中に発見されました。その位置は八剣社の北方の川の中で、井戸の標高約15mです。同時に水郷公園付近を通って南方に消える巾40mほどの流路跡が確認されています。又大門遺跡として、この井戸の北西にあたる川の中央部にも2基の井戸跡が過去に見つかっているそうです。



岡崎市大門町の八剣神社北方の河川内から発見された井戸状遺跡。
近辺から13世紀前半頃の陶器片が出土した(岡崎市教育委員会)